

0. 「困難経験」としての高校中退問題 - 大学等中退者と比較して

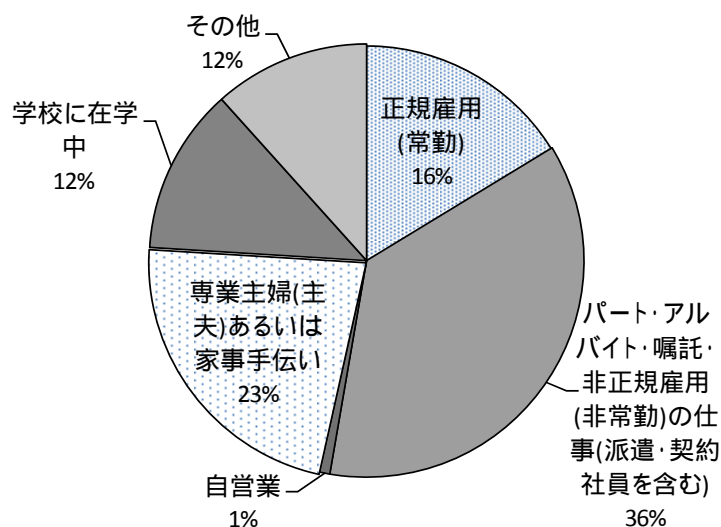
中退問題は、これまで「学校不適応」と解釈されることが多かった。つまり、基礎学力の不足や集団生活への不適応、あるいは不本意な入学などが原因であるという指摘である。そのため、教師の指導の不足や学級の間人関係、あるいは規律重視の生活スタイル、自己肯定感の欠如などありとあらゆる学校教育課題が取り上げられ、吟味されてきた。だが他方で、高校生活への焦点化のゆえに、中退者の中学時代までの生活史(ライフステージごとの経験)や中退前後の社会生活経験(アルバイト体験や家庭生活の変化)、精神医療を含む援助体験の影響などが十分に吟味されてきたわけではない。

今回の WEB 調査はそのすべてに答えてはいないが、いくつかの興味深い知見を提供している。また、同じ中退といっても、大学等の高等教育機関のそれとは異質な社会背景があることも読み取れる。代表的な知見を以下で紹介する。なお、今回の分析対象である高校中退経験をしたことを「困難」と感じた人(129名)とは、困難要因(Q2-1)で「高校中退」としている数「64名」のほか、他の困難要因(ニート、不登校、ひきこもり、その他)を選択した者で Q1 高校時代に「中退した」を選択した者(65名)を加えたものであり、「中退者」とはその意味で用いる。大学等中退者については、すべて経験者であり、192名となっている(このうち、ニート等の何らかの「困難経験」があるとした者の割合は、71.4%であった)。

1. 高校中退者の進路と家庭

今回の高校中退者は、年代別では、25歳以上29歳以下の者が52.7%、性別では女性が65.1%となっており、標本にやや偏りがある。(大学等中退者も、この年齢層が75.5%と最も多いが、男女は半々である。)中退者の進路状況は、図1のようである。予想されるように、非正規雇用従事者が36%と最も多く、女性が多いため、次いで専業主婦等が23%となっていて、正規雇用者は16%にすぎない。一方、学校在学中の者も12%おり、退学しても再度高卒資格試験や復学などによって、学校に戻る者がいることは注目される。さらに最終学歴が高卒の者が3人に1人(31.8%)おり、中退者がすべて高卒の学歴喪失をせず、リカバリーしていることがわかる。

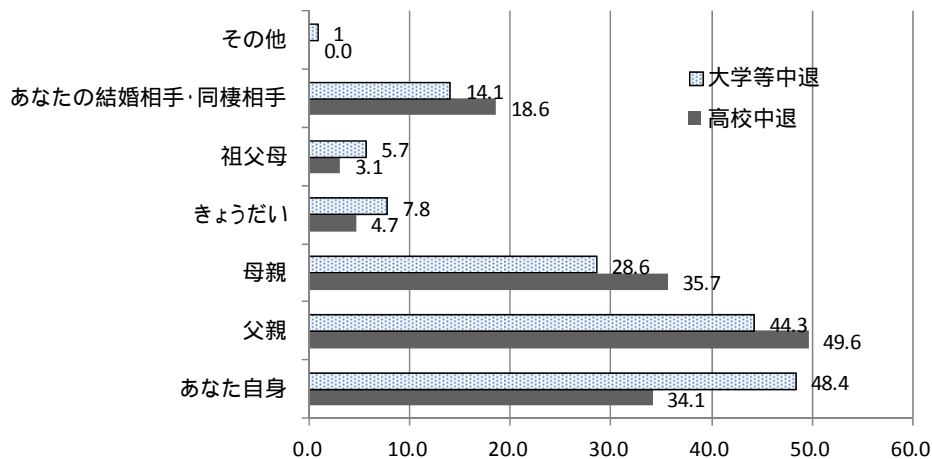
図1 高校中退者の現在の進路



また、家庭環境にも注目すべき点がある。父親と母親の最終学歴は、高校等が最も多く、35.7%と36.4%となっている。大学卒は、25.6%と19.4%（ただし、+短大卒13.2%）となっており、親世代の当該年齢層（40代）の大学進学率の状況、平均35%程度からみるとやや低くなっている。これに比して、大学等中退者では、父親35.9%、母親17.2%（ただし、+短大卒18.8%）となっており、特に、父親の学歴構成に大きな違いがある。

それだけではない。主な生活の収入源の担い手（複数回答）を尋ねると、図2にあるように高校中退者では、「母親」の比重が3人に1人（35.7%）と、「父親」の49.6%に匹敵するほど高くなっていることがわかる。ここには、データからの推測ではあるが、母子家庭や共働き家庭が多いと思われる。これに比して、大学等中退者では、「母親」は28.6%で、「父親」が44.3%と高校中退者とほとんど変わらないのに比して、低くなっている。もちろん、年齢構成が高いこともあって、大学等中退者は自分自身が担い手である割合も約半数（48.4%）と高くなっている。

図2 家計の主たる担い手

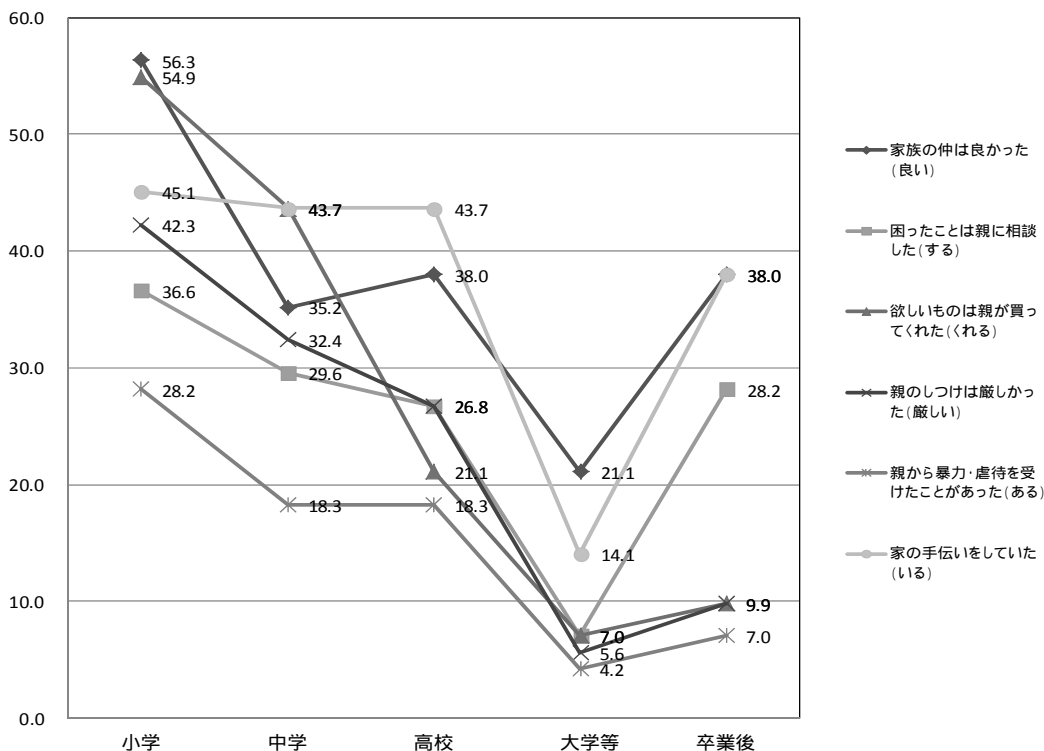


この点は、家族・家庭についてのライフステージごとの体験の回答結果にも端的に現れている。例えば、図3にあるように、「家族の仲は良かった」の回答を見ると、高校中退者は、小学校時代は約半数（56.3%）が「良かった」と評価しているものの、中学・高校時代では大幅に減少しており、20ポイントほども低下して35.2%、38.0%となっている。同様のことは、他の家族経験でもあてはまり、「困ったことは親に相談した」36.6%（小学時）29.6%（中学時）26.8%（高校時）また、「欲しいモノは親が買ってくれた」54.9%（小学時）43.7%（中学時）21.1%（高校時）などとなっている。「親からの虐待・暴力を受けたことがあった」という体験を回答する者の割合も、小学時で28.2%にも及ぶ。高校中退者の家庭は、物理的な住環境である「自分の部屋」などは7割の者があるものの、多くの問題を抱えていたようだ。実際、家庭での困難経験の主な理由は、「家庭内の不和や離別があったから」が31.8%、また、「親への反発があったから」が26.4%と高い割合になっている。

こうした傾向は、大学等中退者の家庭経験には見出しにくい。例えば、「家族の仲は良かった」の回答を見ると、61.9%（小学時）52.5%（中学時）51.1%（高校時）と、大

幅な割合の低下がみとめられない。また、「不和や離別」による困難理由も大きく減少する。

図3 家族との経験



2. 高校中退者の他の困難経験と学校生活・友人関係

高校中退者は、中退以外にどのような困難経験に出会ってきたのか。全体の約 2 割 (20.2%) が「不登校」を、また約 1 割が「ニート」を困難な経験にあげていることが注目される。加えて、約 1 割の「その他」の困難回答の内容は、「病気」がトップであった。

実際に、学校で「不登校を経験したことがあった」とする中退者は、18.6% (小学時) 45.7% (中学時) 56.6% (高校在学時) と半数にも及ぶ。同様に、「学校でいじめにあったことがある」34.1% (小学時) 40.3% (中学時) 15.5% (高校在学時)、「保健室や相談室によく行っていた」19.4% (小学時) 45.7% (中学時) 20.2% (高校在学時) となっていて、主にすでに中学校時代に不登校・いじめ・保健室登校などの経験者の際立って多いことがわかる。

ちなみに、こうした経験は大学等中退者にはこれほどまでに顕著でなく、例えば「不登校」経験の場合、7.8% (小学時) 20.8% (中学時) 16.7% (高校時) となっており、「保健室登校」も、10.9% (小学時) 19.3% (中学時) 15.1% (高校時) にとどまっている。

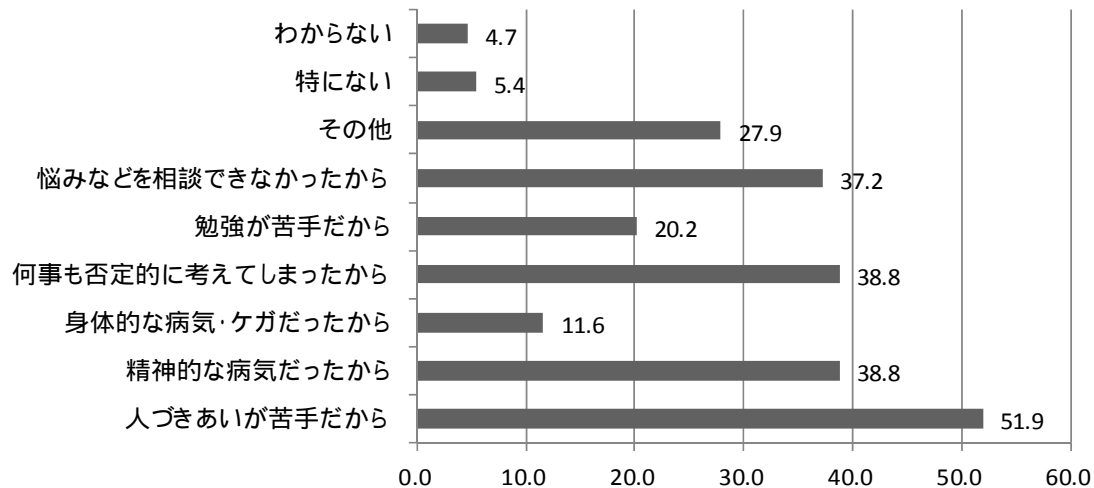
しかしながら、高校中退者が「不良行為」等をしていたかといえ、大部分がそうではなく (18.3% (小学時) 11.3% (中学時) 8.5% (高校時))、他方で対人関係では「何でも話せる仲の良い友だちがいた」者が 3 割程度にすぎない (43.7% (小学時) 36.6% (中学時) 35.2% (高校時)) という結果になっている。

こうした問題に遭遇した自分自身の問題としては、図 4 にあるように、「人付き合いが苦手だから」が 51.9% と半数を超え、次いで「何事も否定的に考えてしまったから」が 38.8%、

「精神的な病気だったから」も 38.8% などとなり、不安・抑うつ状態を訴える回答である。学校生活についても、「学校が嫌いだったから」の 40.3% が際立って高い割合であり、「先生や友達との関係が悪かったから」の 24.0% が続いていて、ここでも対人不安傾向やコミュニケーション能力の問題を訴える中退者の多いことがわかる。

ちなみに、この点は、大学等の中退者とも自己イメージがかなり共通しており、自分が「人付き合いが苦手だから」という理由は 55.7% と半数を超え、対人不安傾向が訴えられている。

図 4 困難経験が生じた自分自身の問題（複数回答）



3. 有効な支援機関の認知と利用状況

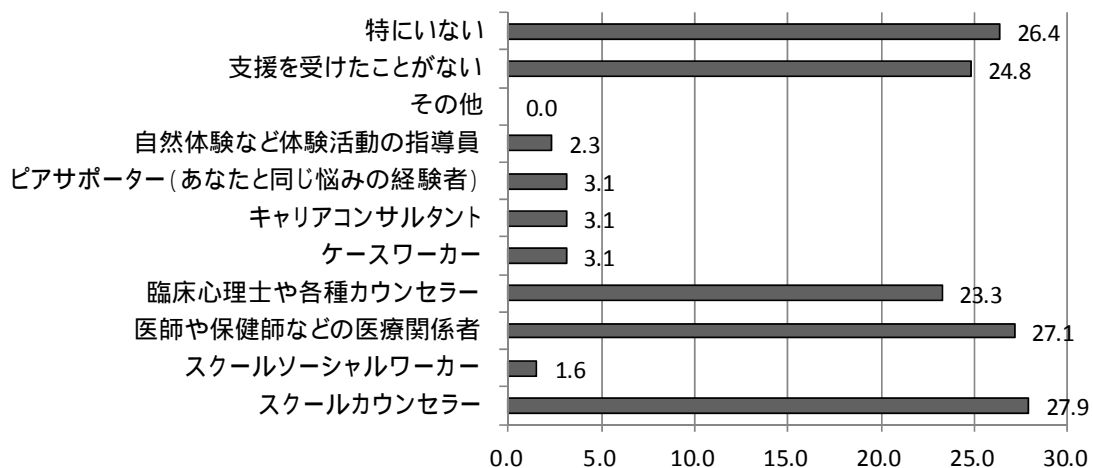
中退者はどのような専門家から支援を受けているのか。図 5 のように、支援者のトップは、「スクールカウンセラー」の 27.9% であり、次いで「医師等の医療関係者」が 27.1%、「臨床心理士等」も 23.3% となっていて、不登校等経験者が多いこともあり、心理主義や医療化が進むなかでの機関の選択となっている。他方で、「支援を受けたことがない」24.8% や「特にない」も 26.4% と非常に高くなっている。

これらの支援効果は思わしくなく、「効果があったものはない」が 52.4% と半数が効果に否定的であり、「医師等の医療関係者」の効果も 22.2% と支持されているにとどまっている。

これに関連して、支援の方法では、「施設に通って相談する」が 21.7% で最も高いものの、掲げられた方法に関しては「支援を受けたことがない」という者が 6 割（60.5%）にも及んでいる。仮に施設を利用している者でも、効果があった施設等は「ない」が約半数（49.0%）で、支援のあり方が当事者に寄り添っていないと思われる結果である。

このことは、支援機関の認知にも関連する。知っているのは自身の経験のあり方に関連するの、「サポート校」46.5%、「フリースクール」35.7%、「児童相談所等福祉機関」30.2%、「ジョブカフェ」22.5% の順となっている。「どれも知らない」という回答者も、約 3 割いる。こうした状況に関連して、「保健所等での心の悩み相談」や「ハローワーク等での就職支援」がそれぞれ、辛うじて 3 割程度の認知度（32.6%、33.3%）となっているにすぎない。

図5 支援を受けた支援者



これら支援機関等を「利用した」となるとさらに低い割合であり、ここでも、「ハローワーク」の 7.8%や「児童相談所」の 7.8%が最も高い割合という厳しい結果である。「親に勧められる」のではなく、「自分で必要を感じて」行ったケースも、「ハローワークの就職支援」における 7 名にとどまる。効果についても、同様に、「ハローワーク」、「少年自然の家等」、「サポート校」をあげる者が数名にとどまっていて、統計的には定かでないが、それぞれ「学校や仕事を探すようになった」、「居場所を見つけた」、「気持ちが落ち着いた」などの効用が 1 - 2 名からあがっている。他方、利用しなかった理由としては、どの機関についても、「利用する必要がなかった」、あるいは、「(機関を知っていた場合)わからない」となっていて、中退者への意識付けが必要と思われる結果である。

求めている支援を尋ねると、「わからない」が約 2 割あるものの、「生活や就学のための経済的援助」18.6%、「仲間と出会え、一緒に活動できる施設」14.0%がやや高くなっていて、参考となる回答結果である。

4. 自己肯定感の低下と身近な相談者の必要

最後にこの困難経験の責任は自分自身にあるのか、あるいは困った時に相談する人はだれになっているのか、困難を切り抜けるような自己の能力・人格はどうかなどを見る。結論を先取りすれば、高校中退者の自己肯定感は低く、大学等の中退者とはやや異なっている。

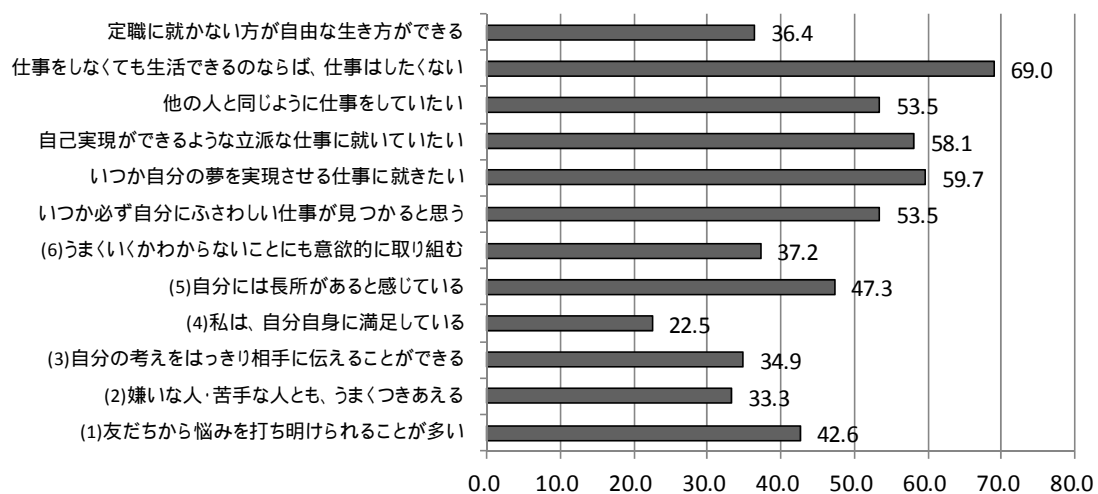
ニート等の問題は「本人と家族で対応すべき」か、あるいは「専門家や支援機関が支援すべき」という問いでは、約 4 割 (38.7%) が前者の回答になっており、自己責任論が意外に強いこと、あるいは他人に問題を知られずに進めるといった秘諾意識が強いものと思われる。後者の回答者のケースでも、費用負担は「本人や家族であるべき」とする回答が 3 割弱 (28.3%) もある。

また、相談しやすい機関や人についても、「家族や親せき」が 39.5%、「友人や知人」が 35.7%と群を抜いて高い割合であり、自分の身近な周囲の人で問題に対処し解決しようとする姿勢が強いといえる。それゆえ、「同じ悩みや経験を持っている人」30.2%や「親身になって話を聞いてくれる人」28.7%などが、相談や支援において強く求められることになっているといえる。

こうした身近な相談者の選択には、自分自身に対する不安や肯定感のなさとも関連しているといえよう（図6）。例えば、「私は自分自身に満足している」という回答は約2割（22.5%）と低く、また「嫌いな人とうまく付き合える」33.3%、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」34.9%と対人関係での身の処し方にも自信がないという結果である。

他方で、「仕事をしなくても生活できるならば、仕事はしたくない」69.0%がきわめて高い回答率であり、就労への意欲はあまり高くなく、同時に「いつか自分の夢を実現させる仕事につきたい」59.7%という希望は強いという一面もある。別な設問の、40歳の時、「幸せになっている」という回答も6割に及び、他力本願な側面もあるといえよう。

図6 自分への評価と仕事への指向



とはいえ、こうした傾向は大学等中退者の結果（例えば、「自分自身に満足」29.2%）よりもやや強く、自己肯定感の弱さが目に付く。実際、「一人ぼっちで寂しいと感じたこと」が一週間のうちに全くなかったという者は半数弱（46.5%）、「悲しいと感じたこと」や「何事も憂鬱だと感じたこと」が全くなかったという者も、それぞれ30.2%と24.8%にとどまっている。

若者も「政策決定に参加すべきだ」という意見への支持は、彼らの7割にも及ぶところであり、厳しい家庭環境等を抱える現状の中から社会参加への入り口を支援し、自己意識の再生をはかることが必要であるといえる結果である。

最後に、本調査結果からみて政策的に提言できることをあげておきたい。中退が生じるまでのライフコースの実態、とりわけ家庭の状況や支援機関へのアクセスの変化などに関する把握が急務である。身近な他者（家庭、友人など）との関係を介した口コミ的な支援情報の提供（復学、精神医療、給付の情報など）を行うことが必要である。心理主義的な支援への偏りを是正した、コミュニティでの多様な社会参加の入り口（「ささやかな一歩」）を構築することが必要である、などが考えられる。